



TITLE:

黄帝医籍研究 一成書と伝承、孔
穴・経脈の認知と変遷一(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

真柳, 誠

CITATION:

真柳, 誠. 黄帝医籍研究 一成書と伝承、孔穴・経脈の認知と変遷一. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-11-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r12965>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	真柳 誠
論文題目	黄帝医籍研究—成書と伝承、孔穴・経脈の認知と変遷—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>序説 黄帝医籍</p> <p>黄帝医籍とは書名に「黄帝」を冠する中国医学古典籍で、漢代の『素問』『九卷（針経・霊枢）』『難経』と初唐までに編纂された『明堂』『甲乙経』『太素』の総称として造語した。その中核は『素問』『九卷』であり、両書の初唐伝本を類編したのが『太素』である。よって『素問』『九卷』『太素』を第Ⅰ部、『難経』『甲乙経』『明堂』を第Ⅱ部に配し、各々の成書と伝承を考究した。さらに第Ⅱ部第三章第三節以下では、紀元前における孔穴・経脈の概念形成から唐代までの変遷を、出土文物と黄帝医籍より議論した。</p> <p>第Ⅰ部</p> <p>第一章 『素問』の伝承と版本</p> <p>本書は前漢までの文献群に基づき1世紀初に編纂され、『傷寒論』序（3世紀初）に「素問」と記録された。のち全元起注本（約500年）と王冰次注本（762年）を経たが、ともに現存しない。全元起本が隋・唐で「黄帝素問」と著録され、書名に黄帝を冠したのは、医官育成の教材として黄老思想で権威性を付与された可能性がある。王冰本も黄帝を冠していた。王冰序は『甲乙経』序（4世紀後半）の表現を一部改変し、『素問』9巻と『霊枢』9巻が『漢書』芸文志の「黄帝内经」18巻であるといい、のち定説とされる。</p> <p>北宋では王冰注本に新校正注を付加した熙寧本24巻の校刊（1069年）が従来から知られ、書題は「補註黄帝内经素問」だった。新たに存在を論証した北宋版には、孫兆による元豊校刊本（1078～85年）、蔡京らによる宣和校刊本（1121年）がある。南宋の紹興本（1155年）では、王継先らが「〔重広補註〕黄帝内经素問」の書題で『黄帝内经霊枢』24巻と合刻し、王冰説の「黄帝内经」を実体化していた。紹定本（1228～33年）も同書題を踏襲した。南宋の中後期刊本と未詳年刊本の存在も推定されたが、これら宋版はみな亡佚している。</p> <p>現存本の来歴も解明できた。熙寧本の覆刻が紹興本で、紹興本の影刻が明の顧從徳本（1550年）だった。元豊本系が元版の読書堂本（1283年）と古林書堂本（1339年）、宣和本系が日本の室町古鈔本、元豊・宣和・紹興本系の混合本が金版だった。熙寧本の旧を保持する顧從徳本には初刻本と補刻本があり、不詳とされてきた明の仿宋版2種は、顧本初刻版と明・無名氏の顧本海賊版だった。顧從徳本と読書堂本・室町古鈔本の校異から、熙寧本・元豊本・宣和本における校刊の実態も知ら</p>			

れた。今後の研究には顧本・読書本・古鈔本の校勘が必須である。

第二章 『九卷』『針経』から『靈枢』へ

2世紀前後に編纂された本書は、『傷寒論』序に「九卷」、『甲乙経』序に「針経九卷」と記録された。唐の針生教材で「黄帝針経」が正称となったのは、『素問』と同じ背景からだろう。新羅と日本でも医官育成の教材とされた。北宋では零本となっていたが、高麗の献本中に完本の『黄帝針経』9巻があり、旧法派の王欽臣が元祐本を刊行（1093年）した。翌年から新法派政権が北宋末まで続き、旧法派による元祐本は重印されなかっただろう。かわりに元祐本も使用し、唐代の伝本を装う偽経『靈枢経』9巻が作成（1116～18年）され、のち亡佚した。金軍による靖康の変で版本まで掠奪されたため、元祐本は現存しない。元祐本の旧貌も従来未詳だったが、金・蒙古・元の文献に見いだされた『黄帝針経』の佚文は、現『靈枢』と篇名・篇順までほぼ対応していた。

南宋では秘書省になかった元祐本を史崧が献上したが、当時は金との紹興和議への不満から「華夷思想」が隠然としてあった。そこで王繼先は元祐本序など「東夷」献本や旧法派の証拠を削除し、書名・巻数も『黄帝内経靈枢』24巻に改めた。さらに『〔重広補註〕黄帝内経素問』24巻と合刻（1155年）し、王冰の「黄帝内経伝説」を実体化した。しかも王繼先の失脚と追放（1161年）により、後の重印本は繼先の序跋等を削除し、宋の史書も目録書も紹興本を黙殺したため、当経緯が歴史の闇に埋もれていた。

紹興本『靈枢』（亡）には元の翻刻本（亡）があり、それを再翻刻した元・古林本と明・無名氏本が現『靈枢』の祖本だった。このように現『靈枢』は北宋の大規模な校定を経なかったため、唐代に遡る旧態が遺存するとみられる。

第三章 『太素』の成書と伝承

『黄帝内経太素』は楊上善が『素問』『九卷』を類編して撰注したが、上善と成書・日本伝来の年代には定説がなかった。近年、上善（589～681年）の墓誌が見いだされ、約675年に本書30巻と『黄帝内経明堂』13巻（上善『明堂』）を高宗に奏上したことが知られた。両書が書名に「黄帝内経」を冠した嚆矢である。上善は太子の李賢に侍し、高宗侍医の孫思邈と面識があっただろう。684年に武則天が李賢を自死させた後、奏上本も太子の司経局にあった稿本も秘匿された。唐に留学した阿倍仲麻呂は司経局校書を初任官（721～27年）し、当時は李賢の名誉が回復されている。帰国を不許とされた仲麻呂は入手した李賢関係書も吉備真備に託し、735年の真備帰朝で『太素』等が日本に将来された。中国では北宋末の金軍侵略で『太素』が亡佚した。

日本では757年の孝謙天皇勅で本書が医生教材とされる。平安時代に流布し、14世紀から次第に消滅するが、仁和寺は本書ほかの医書を16世紀末に収蔵してい

た。仁和寺の古医書を小島尚質らが1831～42年にかけて影鈔し、いずれも唐代の旧を保持するため幕末に多数重鈔され、『素問』『靈樞』などの研究に利用されている。

明治になると、清国公使館随員の楊守敬が1881年に小島家蔵書を一括入手し、1884年に帰郷した。これらに基づく『太素』の中国初版は袁昶本（1897年）だが、釈文等の問題が多い。ついで釈文・校刊したのが蕭延平本（1924年）で、劉貢三も校注を重ねて武漢で刊行（1935年）した。仁和寺本原本は日本で影印（1981年）され、中・日での釈文研究が銭超塵らの「新校正本」（2006年）と左合昌美の「新新校正本」（2009年）に結実した。『素問』『靈樞』等の研究に『太素』を正確に利用する基盤が、ようやく両国で構築されたのである。

第Ⅱ部

第一章 『難経』の伝承史略

本書は2世紀中後期の成書で、『素問』『九卷』を進展させた針法を81章で論じる。『傷寒論』序に「八十一難」と記録され、西晋の皇甫謐は「難経」ともいう。239年頃には呂広注本が出現した。現行本では宋代までの旧注を集成した『難経集注』古鈔本が善本だが、中国では元・滑寿『難経本義』の流行により、かつて『難経集注』が亡佚していた。

近年、ロシア東洋学研究所支部の敦煌文献から4～5世紀の筆写らしい『難経』断簡が発見され、現行本と異なる章順で記述されていた。現行本は、楊玄操が従来の順次を「類例相従」で改編（621～630年）した書に由来するため、玄操以前の旧態の一部が敦煌本で知られたのである。

第二章 『甲乙経』の成書と現伝本の来歴

本書は西晋・皇甫謐の撰とするのが定説だったが、4世紀後半の無名氏撰と論証できた。その序に「素問九卷」と「針経九卷」が『漢志』の「黄帝内经十八卷」といい、当伝説の端緒となる。孔穴主治文の「……主之」形式は仲景医書（3世紀初）から借用し、『脈経』（3世紀前中期）の「類例相従」に倣い、『素問』『九卷』『明堂』の引用文を「事類相従」で編纂・加注していた。『素問』『九卷』の引用文頭を「黄帝問曰」と定型化し、『脈経』と同じ10巻本ゆえ十干で「黄帝甲乙経」と題したのである。

梁『七録』（523年）以前に孔穴図2巻が付録されて12巻本となり、隋ではおそらく医官育成教材との関連で図2巻が削除され、音釈1巻が付録された。皇甫謐撰に託されたのは7世紀前後で、同時に巻8～10が巻8～12に分巻されて再度12巻本となり、現行本まで踏襲される。唐では医生教材として校定され、その系統が敦煌本断簡のP. 3481とS. 10527らしい。

宋版はかつて熙寧校刊の大字本（1069年）が知られていた。新たに元祐再校刊

小字本（１０８８）と政和再々校刊大字本（１１０３～１４年）の存在を論証できたが、みな亡佚している。現存本は『医統正脈全書』（１６０１年）本が元祐本系、明藍格抄本が政和本系だった。医統本は経文・無名氏原注・唐注・北宋熙寧注・北宋元祐注から構成され、明抄本はさらに北宋政和注と南宋・元・明の注等が付加されている。これら系統と条文構造を解明したので、今後は正確な研究と利用ができるようになった。

第三章第一節～第二節 『明堂』の歴史

本書と付録の孔穴『流注図』は３世紀中期の成書と論証できた。条文形式を１世紀初の『神農本草経』から借用し、『九卷』『難経』の語句も転載していた。ロシア東洋学研究所支部の敦煌本断簡は４～５世紀の鈔写だろう。『甲乙経』がほぼ全文を分散して引用（甲乙『明堂』）し、のち異本等の派生もあって本書とその条文が次第に湮滅したらしい。

初唐では甄権が『明堂図』を編纂（約６２０年）した。これを李襲誉らが６３０年に増修した『明堂人形図』１巻は、孔穴部位や主治文が甲乙『明堂』とやや相違する。楊玄操は約６２１～３０年に『明堂音義』２巻を撰述し、甲乙『明堂』と大差ない経文も併記していた。両『唐志』だけに著録の『黄帝明堂経』３巻は、「黄帝」と「経」が付加されるので、針生教材として永徽医疾令（６５１年）前に『明堂人形図』と旧伝『明堂』文献より編纂されただろう。以上の初唐文献は佚文のみ残存する。

孫思邈『千金方』（６５０～５８年）の巻２９・３０（千金『明堂』）は、孔穴図を『明堂人形図』、条文を主に甲乙『明堂』に依拠した。上善『明堂』１３巻（約６７５）は巻１だけ現存し、孔穴部位等を甲乙『明堂』、主治文を主に『黄帝明堂経』から引用した。王燾『外台秘要方』（７５２年）の巻３９（外台『明堂』）は、孔穴部位等を甲乙『明堂』、主治文を甲乙・千金『明堂』と『明堂人形図』に基づく。付説した日本の丹波康頼『医心方』（９８４年）の巻２（医心『明堂』）は、上善『明堂』が主底本だった。各々がいくつかの文献に依拠したのは、いずれの編纂時でも原『明堂』系の伝本がなかったためである。近年、甲乙『明堂』による黄竜祥『黄帝明堂経輯校』、上善『明堂』による小曾戸丈夫ら『黄帝内経明堂』が公刊され、初唐からの原『明堂』探求によりやく終止符がうたれた。

第三章第三節～第六節 孔穴・経脈の認知と変遷

中国戦国時代には青銅凹面鏡などと艾（ヨモギ）による日光からの採火が行われていた。雲夢秦簡『封診式』（前２６２～前２１７年）に記載の検屍規定「久（灸）故癰」からすると、癰痕となる打膿灸が戦国時代からあった。灸瘡からの排膿に砭石を用い、その出血から瀉血法も生まれただろう。癰痕から灸刺部位も次第に認知されたが、まだ穴名も経脈概念もない。初期の石針法を記録した『史記』扁鵲伝の「外三陽

五会」とは、外（頭上）三陽（5列）の五会（俞）計25部位をいい、三才と陰陽五行で表現している。この灸刺列と部位別取穴を、のち『素問』は「五行・行五」と定型化した。敦煌本と甲乙『明堂』の孔穴配列によると、頭部から下行する中心線および並行する背部と胸腹部の「灸刺列」が最初に認知されただろう。これは体幹骨格が上下に連続する構造に基づいており、経脈概念の第1段階だった。

やや遅れて認知されたのが四肢を上行する灸刺列で、背景には手足の怒張した血管と脈診があっただろう。三陰三陽説を併用し、手足から顔面や一部臓腑にいたる第2段階の「11経脈」を記録したのが、前3世紀末以前の『足臂十一脈灸経』である。手足経脈の取穴法を、のち『靈枢』は「五五・二十五、六六・三十六」と定型化していた。頭部・体幹の灸刺列を手足の経脈と連続させたのが前2世紀の綿陽人形、灸刺点もえがいたのが前2～前1世紀の成都人形である。成都人形の背部には臓腑名が記入され、背部の灸刺点と臓腑の相関性が最初に認識されたことを示唆していた。同時に灸刺点への命名が徐々に始まり、部位と主治など初期の孔穴概念が形成されたのは約前1世紀で、その様相が『素問』にみえる。

紀元前後～1世紀には石針にかわり孔穴への金属微針法が普及した。1世紀後半の経脈篇（『九卷』所収）は『足臂』系の灸法を針法に発展させ、臓腑と全身を脈気が大循環する第3段階の「12経脈」を提起。頭部・体幹の孔穴列を形式上は手足経脈に帰属させたが、各穴の属性などは簡単に改変できない。そこで3世紀中期の原『明堂』は、頭部・体幹を下行する孔穴列と手足を上行する臓腑12脈の孔穴列を折衷し、命名された孔穴を術数論から349穴に整理した。

原『明堂』の折衷説は4世紀後半の甲乙『明堂』から7世紀中期の千金『明堂』まで踏襲されたが、千金『明堂』には臓腑概念の浸透と経脈概念の進化がみえる。7世紀後半の上善『明堂』は手足12脈の孔穴配列を『九卷』経脈篇の循環説で再編し、頭部・体幹の孔穴も臓腑12脈と任脈・督脈に分配した。これで全孔穴を「14経脈」に所属する「経穴」としたことは、経脈説の出現と孔穴への命名につぐ進展、かつ現経絡・経穴説の予見ともいえる。8世紀中期の外台『明堂』は『九卷』五腧五使篇の順次で、手足12脈に頭部・体幹と督脈・任脈の孔穴列を連続させていた。しかし甲乙『明堂』以来の孔穴順次に従ったため、同一脈内で反対方向の配列もある。10世紀末の医心『明堂』は臓腑経脈概念の全てを否定し、孔穴を部位別で上→下方向に編成、四肢では1本の孔穴列が絡みつくように下向配列した。

以上のように、頭部・体幹の「孔穴列」が次第に手足の「臓腑経脈」に連続され、上善『明堂』で現経穴・経絡説を予言していた。逆に、『素問』以前の孔穴書を再現しようとしたのが日本の医心『明堂』だった。これら文献のうち、「黄帝医籍」と『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』が北宋で校刊され、以後の孔穴・経脈概念に大きな影響を与えたのである。

結語

本論文は第1に、現存する「黄帝医籍」6文献の成書・伝承と変化の様相を明らかにした。これらに及ぼした歴代王朝の政策、さらに政変・戦乱の影響は甚大だった。第2に、黄帝医籍および出土文物から孔穴と経脈の歴史を考究した。戦国時代から行われていた打膿灸の癍痕から、まず「頭部・体幹部を下行する」列が認識されただろう。やや遅れて「手足を上行する」列が認識され、手足上行列を三陰三陽で11脈とした灸書が馬王堆出土の『足臂』だった。のち金属微針の普及にともない、灸刺部位を孔穴として命名することも始まる。『九卷』経脈篇は『足臂』系の灸法を針法に転用し、手足12経脈が全身を大循環する概念を提起した。さらに原『明堂』は頭部・体幹の孔穴列と手足の12経脈を折衷し、孔穴も術数論から349穴に整理した。原『明堂』は初唐に亡佚していたため、頭部・体幹の孔穴を合理的に手足経脈に配属させる試みがなされる。約675年の上善『明堂』は、経脈篇の循環説で全穴を12経脈と任脈・督脈に再分配し、現在の「経穴・経絡」説を予見していた。こうした孔穴・経脈の認知と変遷には、各文献と傑出した人物の見解が関与していたことも特筆したい。

(論文審査の結果の要旨)

論者は、東アジア伝統医学の基礎的研究として、中国、台湾、日本、韓国、ベトナムに残存する医薬文献について、約5000種類の現物調査を通して網羅的に調べ上げ、その出版の経緯、版本の系統から和刻本の出版回数に至るまで子細にわたって考察し、数多くの論考を発表している。僚友である北里大学東洋医学総合研究所の小曾戸洋氏とともに古医書の文献学的な研究基盤を確立した医学史研究の第一人者であり、伝統鍼灸、医学史関連の学界の指導者として国際的な活躍を繰り広げている。

近年に、これまで発表した個別的なテーマの論文を集成し、新たに書き下ろした著作集を構想し、全6部作の第1冊として『黄帝医籍研究』（汲古書院、2014年11月）を公刊した。本著作集は論者の医薬学研究の集大成を目論んだものであるが、第1冊に関して『明堂』を末篇に置き、長文の論考を展開するのは、中心的論題が科学思想史的アプローチによって鍼灸理論の形成を解明するところにあるからである。そこで、その著述意図を明確にした副題を施し、博士論文として提出するに至った。

論者は、書名に「黄帝」を冠するに至った中国医学の基礎理論書を「黄帝医籍」と総称し、その包括的な考察を繰り広げる。すなわち、後世に「黄帝内経」として知られる『素問』『靈樞』及び唐の楊上善による再編本の『太素』、内経医学の最初の概説書である『難経』、鍼灸の孔穴・経脈の基礎理論を展開した『明堂』、『素問』『靈樞（当時の書名は「九卷」）』『明堂』の3書を合編した『甲乙経』、以上の6種の医書を考察対象に取り上げる。それら一群の医書は、中世、近世から現代に至るまで鍼灸理論を論述した医経として聖典視されてきたものであり、それを一括りにして総合的に考究することは東アジア医学史研究の大道である。しかしながら、これまでの医経研究は、書誌学的な考察を除いて、個別的に取り扱った論考ばかりで、大局的な見地から構造的把握を試みた専著はほとんどない。研究を遅滞させてきた要因として、伝存するテキストの多くが中国では早期に散佚した海外流出本であり、とりわけ『太素』『明堂』が日本にしか残存しなかったために、不十分な形でしか議論されなかったことが指摘される。論者は、そのような研究状況に鑑み、日本に残存する諸本を徹底的に調べ上げ、『千金要方』『千金翼方』『外台秘要方』や『医心方』などの引用文と比較することによって、それらの医籍がいずれも唐宋において大きな改訂を経ており、必ずしも成立当初の姿を留めているわけではないことを論証し、その流传の具体的様相を明確にした。そして、「黄帝医籍」という枠組みを立てて6種の医経の成立過程や相互関係を議論し、初源的な姿を可能な限り復原する試みを行った。そのような統合的な考察は皆無であり、これまでの論考を遥かに凌駕する画期的な研究として高く評価できる。

第Ⅰ部、第Ⅱ部においてなされる諸本の系統的整理や成書年代の考察は、出版の経緯や社会的背景を丹念に追跡して伝存本の諸系統を体系的に整理しており、長年の現物調査の蓄積に基づく圧巻の出来映えである。丹波元胤の『医籍考』をはじめ、富士川游、三木栄両博士から現代の研究者に至る主要な論考を再検討し、蓋然性の高いと

思われる見解を別の角度からも検証したうえで、その精華を余すことなく取り込んでいる。そして、諸本の校合、比較において、著述形式や字句、注釈などに多方面から検討を加え、説得力のある結論を導き出しており、緻密で徹底した文献考証になっている。さらに、考察結果を離散的なままに放置せずに、新出史料や最新の研究成果を活用して歴史的な流れを意欲的に素描し、伝統医療文化の形成や日本的受容に新奇で大胆な仮説を大いに提唱している。したがって、書誌学的な考察に止まらずに、医学思想史研究の域に達しており、すぐれた知見を随所に見出すことができる。そのうえ、今後の研究に向けて、丁寧な研究指針も附言されている。「黄帝医籍」は、医学史以外の分野でも頻用される重要文献であり、本論文の学術的価値はきわめて高い。

第Ⅱ部第三章第三節～第六節において、前節までの文献学的な考察に立脚して、孔穴・経脈をめぐる鍼灸理論の形成過程を詳論する。今日の鍼灸医学の基礎にある経穴理論が北宋に成立した鍼灸書に依拠することを指摘し、遡及的考察を試みた斬新で話題性も高い議論である。従来の研究では手つかずの『明堂』関連文献に鋭い考察のメスを入れ、時系列に整理して理論的な解析を行ったことは、特筆に値する。しかも、出土簡帛資料との関連性を探り、先秦から中世を経て北宋に至る変遷を体系的に描き出しており、伝統鍼灸のパラダイム形成に新たな地平を切り開いている。

孔穴・経脈の理論的展開を議論するには、「黄帝医籍」に加えて王叔和の『脈経』『脈訣』（後世の仮託書）も含めるべきではないかという指摘がなされた。しかし、それらについても論者はすでに内容的な吟味を行い、いくつかの論文も発表済みであるが、全体的な構成のバランスを考慮したために6部作の第2冊目において公表することだった。今後において、そのような補完がなされるならば、本論文のスケールの大きさ、考察内容の重厚さをさらに高めることができるだろう。また、四川省綿陽市前漢墓から発掘された木製人形、成都市老官山前漢墓から出土した医簡などの最新の出土文物に関していち早く情報を入手し、新たな仮説を構築していることは評価できるが、脱稿後に発表された出土報告によると、見直しすべき点が出てきているように思われる。写真版や釈文が公表された後に、自説の再検討を期待したい。

中国思想史研究の立場から言えば、本論文が明らかにした鍼灸理論化の流れは、重要な考究対象である陰陽五行説の形成や展開に大きな指標を与え、医学文献を扱う研究基盤を提供している。その意味で、医学史のみならず、思想史、科学思想史の研究に裨益するところが甚大であるように思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年10月5日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。